

## 「手当て」は文化遺産

クリニックいのうえ井上勝六

「最初の面会はいつも他より疲れる。最初の面会のゴールは、たくさんのかたを聞き出すのではなく、信頼関係を築くことだ」。これは弁護を依頼にきた客に対し、弁護士の感想を記したある小説の一説(シリル・ネザマフィ『サラム』)である。「弁護士は裁判に勝つため客の様々な情報が必要だが、そのためには客のプライベートの奥まで土足で入り込まなければならない。客は味方である弁護士の質問に答えるものの、さりとて心のすべてを開くわけではないから、そうならないよう最大限の配慮が必要だ。ところが最近の若い弁護士は相手の目を見ずにプライベートな情報までパソコンに入力している。それが客にどれほど無関心さと冷たさを感じさせているかも知らずに。ちゃんと目を見て話をすれば互いの小さな反応や顔の動きも理解でき、だんだん何でも話せる仲になって信頼関係が成り立っていくのに・・・」と続く。

これは医療と関係ない法曹界の話だが、残念ながら最新の医療の現場も同様らしい。病院を受診した患者さんから「医者は画像ばかりを見て、私の顔をほとんど見ない」という不満話をよく聞く。確かに画像診断や血液診断など医療の進歩は著しく、それらはパソコンを通して示されるから、医師はそのデータに集中せざるをえない。そのような背景があるからだろう、あるコンサルタントは「タスク処理型(コンピューターが処理する仕事の単位)の定型労働が機械化されていくのは、工場における肉体労働が機械化されてきたのと同じ原理である。臨床医の労働も同様である。症状(入力情報)に対して診断が決まれば処方(出力)は一意的に決まる」「現場の医療や調剤作業は、創造性や独創性があるとはならない」と記している(『タレント』の時代・酒井崇男著)。

しかし、患者の目や顔を見、話を聞き、脈や腹に触れるような、伝統的な診療が激減した臨床の現場での患者の思いはどうなのか。2015年4月、日本医師会館に招かれたダライ・ラマ法王の説話は、そんな患者の気持ちを代弁したものだろう。

「医師と患者の関係について、患者は医師が思いやりと温かい心を持って自分を診てくれていると感じると、安心して元気を与えられ、回復の速度は早いと思う。一方で、自分をまるで機械を修理しているように接する医師だと感じると、実験されているとさえ思ってしまう。医師は優れた技術と知識や経験を持っているが、患者への思いやりにも力を注いで欲しい。そうすれば患者は新たな命を授かったとさえ思える」

診察・診断が同時に治療でもある漢方では、ある疾患が特別に現す特異症候(診断には現在医学が圧倒的に優れている)を含めて、疾患のときに共通して現れる非特異症状(倦怠感や食欲不振、不定愁訴など)を整理し診断を下す。その方法には望診、問診、問診、切診があり、望診は計量化に馴染まないものを観る、問診は体の内なる声に耳を傾ける、問診は言葉で聞き取る、切診は脈診や腹診など手当による診察である。古人は「望んで之を知るを神という」(望診だけで診断しうる域に入った者を、技、神に入るといった)と述べたが、医師の五感を発揮した四診を通し、医師と患者間のコミュニケ

ーションは自ずと深まり、その信頼関係によって病気は軽快しやすく、満足感や治癒率も高まろう。

精神科の分野では「心の病」は薬だけでは治らず、人と人との関係の中でしか治っていかないという。患部に手を当て疼痛を鎮める「手当て」は世界に共通するものだが、有効なのは信頼感があるからだろうし、ローヤル・タッチ（王の触手療法）は国王が病人の患部に触れる治療法で、17～18世紀、ヨーロッパで広まったという。

「指に触るその毛はすべて言葉なり さびしき犬よかなしき夕べよ」と、若山牧水は「さびしき犬」と心を通わず触覚の奥深さを詠んだが、実際、人間の皮膚の感覚は大変鋭敏で、たとえば鉄板の凸凹を調べるのに100分の1mm前後なら機械で調べられるが、1000分の1mmになると機械では不可能で、指尖の触覚に頼るとのこと。『驚きの皮膚』（伝田光洋）によると、なんと皮膚は「見る」「聴く」「味わう」「嗅ぐ」こともできるという。いずれにしても様々な効用のある「手当て」が、今こそ臨床の現場で積極的に活用されることが望まれよう。

ところで去る8月、大阪で中1男女殺人事件が発生、犯人は防犯カメラの映像によって特定されたが、街の隅々までカメラが設置されている現実と、その情報分析能に驚かされた。一方、朝方の無人の商店街を彷徨う二人の中学生の映像は、子どもたちに無関心な寒々しい社会の実相を示していた。防犯カメラは犯人の逮捕には役立っても、子どもたちの命を救うことはできなかったのだ。本件は人間関係が希薄化した文明社会を象徴しているが、このような現象は子育ての現場にも広がっている。たとえば、若い母親ほどスマートフォンやパソコンを使う時間が長く、逆に子どもに絵本を読み聞かせる機会が少ないという。乳幼児の心の発達のためには母子間の濃密なコミュニケーションが欠かせないのに・・・、文科省の発表によると、小学生の暴力行為が2014年度に過去最多（11468件）となり、しかも低年齢化しているという。「感情のコントロールができず、ささいなことで暴力に至る」対人関係の未熟な児童の心を満たすためには、やはり丁寧な人間関係を養うしかあるまい。小売業界内で苦戦する老舗デパートの生き残り戦略は、お客さまに最高のおもてなしができるよう「現場力」を高めること、そのためには客と直接接する販売員の環境やコンディションを最高のものにすることだという。

さて、日本の人口10万人あたりの医師数は10年後に先進国の平均280人を上回り、2030年319人、2040年には379人になるという（厚労省発表）。果たして将来、このような医師の増加が患者の心に満足感をもたらすだろうか？ 残念ながら現状のままではそうはなるまい。しかし、人口減少の進む中、10年後に全国の病床を1割以上減らすという政府推計もあり、医師過剰時代は避けて通れない。そんな中でどのような医師が求められるか、技術や知識と同時に五感を駆使した伝統医療がより必要とされよう。それは顕著な普遍的な価値を持つ文化遺産でもあるからだ。